

2010年8月20日(修正) 東日本区1998~2011ヒストリアン 吉田 明弘

『おお プレネリ』の訳詞者は、だれ？

現在のワイズメンの多くの方にとって、『おお プレネリ』という歌は、『遠き山に日は落ちて』や『燃えるよ 燃える』と同様に、キャンプやリクリエーション・ソングとして、懐かしい歌の五指に入るのではないのでしょうか。

この「おお プレネリ」に記されている訳詞者・松田稔という名について、もしかしたら私が知っている松田稔さんではないだろうか、以前から気にかかっていた。

今回、インターネット検索をして、この歌は、元々、19世紀に生まれたスイス民謡で、1910年にスイスの歌曲詩人で、国民軍中尉のツイベリが歌詞をつけて、出版したこと、第一次世界大戦中には兵士たちに愛唱され、日本では、松田稔によって歌詞が付けられ、YMCA 歌集に載り、NHK 放送合唱団に歌われ、全国に広まったこと、を知りました。

私の知る松田稔さんは、元大阪 YMCA の主事で、後に日本リクリエーション協会に関係されていたと記憶していました。リクリエーション協会に電話で問い合わせたところ、松田さんは日本キャンプ協会の方だと教えられました。そちらに電話して意を伝えると、事務局長が知られて、松田稔さんは、同協会の会長を務められ、2年ほど前に亡くなられたとのことでした。『おお プレネリ』については、思いがけなく松田稔さんが生前に行った講演の記録があるとのこと、ご親切にも内容を詳しく電話で話していただきました。

訳詞は松田稔。時期は1949(昭和24)年のことなどでした。やや不明なところはありましたが、私の知っている松田稔さんと同一人物であろうと確信しました。

事務局長に、この講演内容を発表したいのですがと、相談しましたら、構わないとのこと、講演会の記録は、大阪府キャンプ協会が1993年に発行したブックレット『松田稔のキャンプの世界』に掲載されていると教えてもらえました。

そこで、大阪府キャンプ協会から、冊子を求めました。これには『おお プレネリ』誕生のいきさつが記されていました。以下、括弧内は私(吉田)の註です。

訳詞の誕生のいきさつ

太平洋戦争敗戦の後、大阪 YMCA 主事の松田稔さんは、ある教会の牧師に依頼されて、淡路島・松帆の浦でキャンプを指導しました。教会に集う家族や子ども、青年たちが参加しました。

キャンプファイヤーが終わり、子どもたちはテントに戻りました。しかし、青年たちはそれではおさまらない。学生も、軍隊帰りもいました。もう少しやりたいということで、いったんは消えた火を燃やし始めました。軍歌や歌謡曲が出てきて、そのうち、とんでもない歌が出ました。

松田さんは、これは子どもに聞かせたくない、予定の時間も過ぎた、もうやめようと提案しました。ところが、日頃の生活から離れ、開放感を味わっている青年たちは、「自由だ」「民主主義だ」と反発しました。松田さんは、叱りつけて解散させましたが、数人がテントに来て、なぜいけないのかということで、自由と責任についてのディスカッションになりました。松田さん自身、叱りながらも、青年たちが家族と一緒に歌える歌がないことに、自身の責任を感じたそうです。

同じ頃、松田さんは R.L.ダーギン (Russel.L. Durgin・北米 YMCA からの派遣主事) からレク

リエーションの指導を受けました。ダーギンから、もらった本の中にあの曲があったのです。2番、3番は大人向けの歌詞なので、1番だけに日本語の詞をつけてみると、みながすぐに歌いました。

1949 昭和 24 年のことです。

そこで、横浜 YMCA の高橋（四郎主事・後に総主事）と組んで出したら、あっという間に広がり、NHK が注目するところになり、1ヶ月間、ラジオで朝と昼とに流したため、全国で歌われるようになりました。（日本 YMCA 同盟は、訳詞のされた翌 1950 年 7 月に、松田・高橋を編集者として歌集『楽しい歌』を刊行し、ここには『おおブレネリ』を収載されています）。

当時、松田さんが音楽の指揮法を習っていた作曲家の津川圭一（『YMCA の歌』の作曲者）から、ぜひ著作権をとるようと、長文の手紙をもらいました。その気になりましたが、手紙の最後に、印税が入るよ、とあったのが気に入らず、そのままにして、権利はとらなかったそうです。

松田さんは、「いい歌かどうかはわかりませんが、40年（今では60年）以上もたって、まだこの歌を歌ってくれる人がいるということで、私の願いは、かないました」と語っています。

私の知る松田稔さん

私の、松田稔さんの名との出会いは、『大阪ワイズメンズクラブ小史』の敗戦直後の項の「宮崎忠勝主事昇天の後を継いだ松田稔主事」との記述でした。松田とは何者？戦前の大阪 YMCA に詳しい奈良信さん（東京山手）にお尋ねしたら、歌がうまく、漫画も書いて、子どもたちに人気のある YMCA 若手スタッフだったとのことでした。これは奈良信さんの少年時代の記憶であって、敗戦直後、総主事奈良傳さんが上海から帰還前の時期には、松田さんが大阪 YMCA と大阪ワイズメンの中心的存在だったのでしょう。

松田さんとワイズメンのかかわりは、奈良傳さんが、日本区報 1961 年 5 月号に『松田稔兄と私』に書いています。（ワイズ読本にも転載）。

松田さんは、昭和初年、大阪クラブ発会後には、奈良傳主事を助けて、ブリテン作成などの事務を担当し、戦争末期にはメンバーとなりました。

戦後は 1947 年から 5 年間、区理事を務めた奈良さんを助けて、区書記として日本区の復興、新生を助けました。名簿作成などの仕事をすべて引き受け、奈良傳さんは「ワイズ半分、YMCA 半分に働き、このような主事は二度と出ない」と書いています。ワイズメンズクラブが YMCA 運動の先駆的な役割を担っていた時代でした。

訳詞者・松田稔さんの人となり

松田稔さんは 1910 年生まれ、奈良県出身です。

小学校 6 年の時に、校長に連れられて、当時、日本のアンデルセンと謳われた巖谷小波（いわや・さざなみ 1870-1933）の講演を聴きに行きました。帰路に出合った中学校の若い教師に導かれて、子どものグループの指導をするようになり、中学時代には YMCA キャンプに参加するようになり、このキャンプは、大阪 YMCA の奈良傳主事が導入したアメリカ式キャンプで、病みつきになり、毎年参加しました。

日立造船を経て、（1930 年に）大阪 YMCA に入職しました。（夜は YMCA で働き、昼は関西学院神学部で学びました）。グループ活動、野外活動で力を発揮し、戦前、戦後の混乱期を乗り越え、大阪 YMCA 副総主事となりました。

1955 年頃、大阪府青少年問題協議会で、青少年の不良、非行が取り上げられ、青少年の健全育成のために野外活動協会が設立されました。総合青少年活動センターが建設されることになり、キャンプとグループワークの草分けの奈良さんが理事長に、松田さんは副専門委員となりました。

松田さんは、敷地の選定、施設の計画にあたりました。62 万坪の敷地を購入し、7 個のキャンプ場に加えて、養魚場、放牧場のある壮大なプランでした。いよいよオープンする運びになって、この所長を務められるのは松田さんしかいないということになり、請われて、1963（昭和 38）年、

大阪 YMCA 副総主事を辞して、センター所長に就任しました。

著書に、『ゲームとその導き方』(高橋四郎と共著、YMCA 出版)、『続 ゲームとその導き方(同) 『ザ・キャンプ』(創元社)があります。

「ああ、それもそうやな」人生

『松田稔のキャンプの世界』を読みますと、松田さんの逆らわない生き方が伝わってきます。

小学 6 年生の時に校長先生に連れられて、わけもわからずに巖谷小波の講演会に行きました。それもコウエンを公園と聞きちがえて。その帰り道で出会った小波に心酔する若い中学教師に誘われて進学先を決めました。その教師の導きで、子ども会のリーダーをすることになるのです。

一方、友人に言われるままに、生まれて初めてキャンプに参加しました。これが YMCA との出会いでした。

そして、日立造船を経て、1933(昭和 8)年に大阪 YMCA に入るわけです。

1964 年には大阪府からの要望で大阪府立総合青少年野外活動センターの所長に就くことになります。これも自らの意志ではありません。府の要請と奈良傳さんのすすめによるのです。

松田さんの進む道は、いつも他人から示されているように思えます。唯一の例外は、YMCA に入る時に断わられても断られても日参して、頼み続けたことくらいです。これとても、日立造船に勤務した時代に、毎年夏になると病気を理由に休んでキャンプに参加していたため、業を煮やした課長から「そんなに子どもやキャンプが好きなら、YMCA に入れてもらえ」と言われ、「それもそうだ」と思ったからなのです。

松田稔さんは、86 歳(あるいは 87 歳)まで、ボランティアで日本キャンプ協会会長を務められました。彼をつき動かしたのは、なんだったのでしょうか。

戦前のひとつのエピソードを紹介します。

YMCA でグループ活動を実践していた松田さ

んが、問題の生徒を多くかかえる中学の校長に請われて、毎週金曜日の放課後にグループ活動を指導していたことがありました。これは逃げ出さなくなるような辛い役割だったそうです。まったく乗り気でない 17 人をなんとか連れ出して、やり遂げた 1 週間のキャンプの話は、痛快です。キャンプのもつ素晴らしさが描かれています。

キャンプ最後のキャンプファイヤーが果てた後、ひとりの少年が残り、涙をぼろぼろこぼしながら、松田さんの手を握って言いました。「こんな素晴らしいことはありませんでした。私はこれから一生懸命勉強します。そして大学を出たら、先生の後継ぎになりますから、YMCA に入れてください」。

この後継ぎ少年は、大学生になると、毎年、ボランティアとして、YMCA キャンプの準備、カウンセリングを手伝ってくれました。

しかし、彼も学徒動員となり、九州の太刀洗で飛行隊の訓練を受け、満州に送られました。時代は、もはやキャンプを許さなくなっていました。

彼から最後の手紙が届きました。

「先生の後を継ぐと約束しましたが、約束を果たすことはできません。なぜなら、私は特攻隊長に選ばれたのです」「私のような人間が一週間でこのようになったことを思うと、先生、命ある限り青少年の仕事を続けて欲しいと思います。そしてキャンプを続けてください」。

あとがき

当初は、『おお プレネリ』について、もっと追いかけてみようかと思いました。

しかしやめました。この歌をテーマにして卒論を書きたいという国立音大の女子学生 3 人を松田さんは自宅に泊めて、取材に応じたそうです。なぜ裏も表もなく明るいこの歌に着目したのでしょうか。読んではいませんが、多分、今は、この卒論を超えるものを書くことは難しいでしょう。

今回の主事松田稔さんについての取材で小野実連絡主事の助力をいただきました。